親子の相互交渉における行動の同調性の発達

小林　礼子

【目的】人間は家庭や学校や会社など生涯を通じて様々な相手と相互交渉を行い、絆を形成するが、その基盤となっているのは、乳幼児期に形成される養育者と幼児の間の愛着という名の絆である。繁多(1986)によれば、母子の安定した愛着を形成するための条件として、母が子どもの発する信号に対し、敏感に適切に応答することと、一定量以上の相互作用があること、子どもとの相互作用を喜びを持って行うことなどを挙げている。母子が安定した愛着を形成するには、母親が子の行動に敏感に同調する質の高い相互作用を行う必要がある。一方で、乳児は生後初期から母親の語りかけに同調して体を動かすことも知られている(小林ら, 1983)。本研究では、ホームビデオの分析から、親子の相互交渉における同調性の発達的変化を調べることを目的とした。

【方法】本研究では、ホームビデオに記録された、1 組の養育者と幼児(男)の生後 4 ヵ月から 1 歳 9 ヵ月までの映像を観察し、親子の相互交渉を秒単位で詳細に記述して、行動の時系列データを得た。まず、各行動の 1 分間当たりの生起頻度と児の年齢との相関を計算し、行動の発達的変化を調べた。次に、親と幼児の各行動について「見る」(1)から「語りかける」(5)まで関わりの積極性に応じて 5 段階で重み付けを行い、同じ時間枠で同時に生起した行動は、重み付けされたスコアを足し合わせてその時間枠のスコアとし、親と幼児のそれぞれについて時系列グラフを作成した。さらに、元の時系列から 1 次の差分をとって得られた親子の時系列データをもとに相互相関係数を算出し、母親と子どもの相互の同調性を評価した。

【結果と考察】行動の生起頻度の発達的変化については、幼児の加齢に伴い親の模倣の生起回数ならびに総持続時間が増加した。模倣は文字通り相手の行動を観察し、その行動の直後に同じ行動を再現することであり、行動のタイミングだけでなく行動の形態に関して相手の行動への同調を意味する。模倣という形で親が子に同調する傾向は 4 ヵ月から 1 歳 9 ヵ月の間に徐々に増加すると言える。親が幼児に物を見せたり渡したりする行動の持続時間は加齢に伴い減少傾向を示した。物を見せたり、渡したりする行動は共同注意の開始行動と言える。一方、幼児による共同注意の開始行動としての指さしが加齢に伴い増加を示したことは、親子の共同注意を伴う相互交渉の開始者が、幼児の加齢に伴い、親から幼児へと次第にシフトしていったことを意味する。幼児が親を見る行動の平均持続時間は特に 6 ヵ月と 8 ヵ月で長かったが、これは 9 ヵ月革命により他者の視点を取得する以前の親―子の二項関係による注視と考えられる。幼児の共同注意行動は 11 ヵ月までは見られず、1 歳 1 ヵ月以降見られるようになり、全体としては加齢に伴い増加する傾向を示した。

親子の相互交渉の時系列データをもとに相互相関分析を行ったところ、生後 6 ヵ月と 1 歳 1 ヵ月において、親からの関わりのそれぞれ 2 秒後と 1 秒後に幼児の有意な反応の高まりが見られたが、全体としては、親子間で相互に応答し合う明確な同調は確認できなかった。

その理由としては、ホームビデオを分析の対象としたことで、親と子の行動が同じレベルで十分に観察できずに情報の部分的な欠落や偏りがあったことと、観察対象が 1 組の親子のみであり、しかも 5 分という短い時間であったため、親子それぞれの行動の個性や場面の偏りが結果に影響を与えたことなどが考えられる。(比較発達心理学)